
とある科学の魔女継血（仮）

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の魔女継血（仮）

【Nコード】

N1122P

【作者名】

ゆーたん

【あらすじ】

学園都市の暗部の一つ少女ら4人で構成されたチーム「アイテム」。それらを上から覗きこむ少女は、アイテムが確保したブツを狙い立ちほだかる。

（前書き）

話が浮かんだったので、どうしても書きたかったので書いて見ました（笑）

「すでに対象は殲滅、ブツは別のやつらが回収」

月明かりが仄かに視界を助ける程度の暗い路地裏。建物に挟まれたこの路地に、黒服の屈強そうな男達が地に伏せて沈黙している。退屈そうな表情を浮かべ事務的な動作で背を向けて逃げる男の始末に掛かる。そんな様子をビルの三階の位置にある窓枠に座っている人物が、携帯で状況を報告していた。電話の向こうの声は冷静に、満足そうに答える。

「えー、またゲームですか？」

心底嫌そうな声色で答える人物の声は、幼さを宿している。電話の向こうから発せられる言葉を聞くうちに、少しばかり上機嫌になったのか端をあげた口から白い歯が顔を覗かせた。

「こいつらからブツを奪ったら報酬五割増し？……ん、奪えなくても減額無しだからね」

そう言い放ち携帯の通話をきった人物は、下の様子を伺う。ベレ帽の様な帽子を被った少女とジャージを着た少女は、路地裏から逃げた男達を追いかけて行き建物の死角に消えていった。残りは2名、ノースリーブパーカーを着た少女と、彼女達に指示を出している大人びた女性。目標のブツの入ったトランクケースに近いパーカの少女に狙いを定めると、座っていた窓枠からふわりと身を浮かせ静かに降下する。

時間にして僅か数秒、息を殺し気配すらなくした人物は目標の少

女から視線を外さない。

「絹は——」

それに気づいてパーカーの少女へ注意を促すも、その言葉の途中ですでに上からの襲撃者が絹旗に直撃する。

「あれ？」

上という死角からの攻撃で、確実に一人は仕留めたと思っていた人物は目の前の光景を疑った。空中で体勢を回転させ頭から絹旗へ降下した人物は、自身の右手を突き出しいつも通りその異端なる右手で対象の肩を掴んだ……はずだった。

「私は超大丈夫です」

重力の分威力も増しているため、通常であればそのまま地面に叩きつけているはずなのだが、現状は違い、絹旗の肩を掴んでいるはずの指は、彼女の体から少しだけ浮いている。

「へ……面白い能力ね」

驚きはあったもののそれでもその人物は、冷静さを欠く事無く絹旗から飛び退いた。麦野と絹旗は、お互いの間に現れた存在に視線を移した。黒髪のショートヘアで丸型レンズのサングラスをかけ、白地のプリントTシャツに紺のパーカーを羽織り、ティアド仕様のミニスカートからのびる足にはニーハイ、動きやすいスニーカーを履いている。

「あんだ、私たちの邪魔しに——」

「そのトランクケースの中身、あたしに頂戴♪」

問いかけた麦野の言葉を遮り、襲撃者である少女は絹旗に声をかけた。ブチッと何かがキレたように、少女の背後から殺気を放つ麦野に対し半身だけ向きを変えた少女は、にこつと微笑を浮かべる。

「原子崩し《その能力》、計算までに多少のラグがあるでしょ。その隙に、あたしなら殺^ヤれるよ？」

自信有り気な少女の物言いに、我慢が限界に來た麦野は急速に演算を始めその瞳に狂気を宿す。

「麦野、超落ち着いてください。私がやります」

麦野の能力を知っているだけに、それを使わせない方が得策と判断した絹旗は麦野を制し少女の方へ歩みを進めた。怒りの収まらない麦野であったが、絹旗がトランクケースを麦野の方へ放り投げるのを確認するとそれを受け取る。

「チツ」

奥歯を噛み締めた麦野だが、あくまでも仕事の事は忘れる事はせず傷をつけないように襲撃者と絹旗から少し距離を取った。絹旗は被っていたフードを脱ぎ、双眸で襲撃者の少女を見つめる。サン格拉斯の間から覗かせる視線の鋭さに、只者では無い事を感じさせるには十分であった。

「あんた達はたしか…アイテムってチームだっけ？」

タン、と地面を軽やかに蹴った少女は独特の歩幅で絹旗との間合

いをつめる。あまりの速さに驚いた絹旗は、重心を後ろに下げると同時に目の前にいた少女の姿を見失う。

「うわ……へこむなあ」

背後からの声に素早く顔だけ後ろを向くも、すでにそこに少女の姿はなく気配は自信の前に移動していた。既に振り上げられていた右手が、獲物を狩る猛獣の牙のように絹旗目掛けて振り下ろされる。が、その指はやはり先ほどと同じように絹旗に触れる事無く浮いている。少女が少しだけ固まっている隙を狙い、右手を突き上げるも、さっと身を翻した少女には届かなかった。

「その程度の打撃など、私の室素装甲は貫徹しません」
オフエンスアーマー

「へえ……さっすがレベル四だけあるね」

攻撃が効かないと宣言した絹旗に対し、楽しそうに微笑む少女。少女は二度三度右手をリラックスさせるように、ぶらぶらさせると少しだけ前かがみに重心を動かす。

「はあ……、今こそ汝が右手に アスクレピオス その呪わしき命運尽き果てるまで 高き銀河より降りたもう蛇遣い座を宿すものなり」

少女の口が発し紡ぐ言葉、錯覚か幻か……少女の周りを蠢くそれが影響しているのか麦野と絹旗は、背筋に寒気を感じていく。

「されば我は求め訴えたり 喰らえ その毒蛇の牙を以て……」

前かがみの状態を起こし、にやりと笑みを浮かべた少女をみた絹旗はそれが臨戦態勢なのだと察知し身構えた。

「避ける、絹――」

叫ぶ麦野の目に入っただのは、少女の突き出した右手が絹旗の室素装甲に触れている姿。突き立てた指は絹旗の鳩尾を目掛けるも、案の定室素装甲に防がれるも少女の生み出した衝撃は予想以上で、絹旗は後方の建物の壁へと吹き飛ばされ激突した。

「ぐえ…ゴツホ…ゴホ…う、うおええ」

咳き込みながらも状態を起こす絹旗であつたが、胃からの逆流物を地面へと垂らす。

「外傷はなくても、衝撃だけは防げないでしょ」

「デメエ……、何者だ？」

トランクケースから離れ、ゆっくりと少女に麦野は近づいた。少しだけキレかかっていた理由は、仲間がやられたからではなく、小馬鹿にしているような少女の態度に。

「……」

無言で麦野に睨み返す少女であつたが、携帯からの規則正しいメロディがこの場を包む。パーカーのポケットに入れたままの左手を出し、握っていた携帯操作し耳に当てる。声色はいつも通り小馬鹿にしたような高さにテンション、しかしそれからは想像できないほど少女の表情は殺気に満ちている。

「えええ！？時間切れって……はい、わかりました」

声のテンションがガクつと落ちた少女は、先ほどまで放っていた

殺気が嘘のように萎み、表情にもやる気が感じられない。

「はあ……、やる気なくなっちゃった。もう帰るね」

「帰れると思ってるのか…あア？」

「思ってるよ……、あたしは美堂^{みどう} エリス。奪還屋^{みどう}…まあ、よろず屋つてのが正確かもね」

「よろず屋エリス……」

お互い視線をぶつけたままいること数秒、不意に少女が投げた閃光玉によって視界を奪われた麦野は、視界が回復する時にはすでに少女の姿は無かった。

彼女達アイテムの移動用の車内で、傷を見るために服を抜いた絹旗の体をみて他のメンバーが驚きを漏らした。室素装甲を貫かれないう指の外傷は無いはずの絹旗の鳩尾の周りには、突き立てたであろう指のあとがくつきりと赤く残っていた。

——美堂エリス…か……覚えておいてやるよ。今度会ったら……

ニヤリと狂気に満ちた笑みを静かに浮かべた麦野は、すぐに再会する事になるうとは知る由もなかった。

（後書き）

どんなキャラなのか、だいたいお察しですよね？

魔女の血を引くバトルの天才と呼ばれた男の、孫にあたります。

という、妄想から生まれたキャラでした♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122p/>

とある科学の魔女継血（仮）

2010年11月29日03時13分発行